展示即売会 ●日　時：10月3（金）～5（日）
●場　所：まほろば本店 2Fにて
癒しの繊維 竹布 -TAKEFU-

連載
吉永みち子の 会いたい人に会いに行く
第2回

竹から繊維。誰もやったことのないモノづくりへの挑戦
相田雅彦さん
「竹布（たけふ）」開発者

モノづくりの現場には、さまざまな物語がある。完成に至るまでの気の遠くなるような時間や手間、試行錯誤。それらの苦労を苦労とも思わないほどの情熱。そうして生み出された製品は、私たちの心を捉える。今月の吉永さんは、そんなモノづくりに携わる方に会いに……。

ある日、偶然にもこんな話が耳に飛び込んできた。場所は、とある居酒屋。

「傷口にガーゼを置いて包帯を巻くと、ガーゼが膿などで固まって、薬をつけ直す時に皮膚ごと剥がれてしまうことがあるよね。でも竹から作ったガーゼだと皮膚にくっつきにくいから、皮膚ごと剥がれることがないんだ」

思わず「それ、本当？　何でそうなるの？」と質問してしまった。それが相田雅彦さんとの最初の出会いだった。

2年前、腕をヤケドした時、まさにガーゼが皮膚にくっついて、毎回痛い思いをした上に、無理に剥がすからまたイチから出直し。これでは永遠に治らないんじゃないかと不安になった経験がある。ガーゼがくっつかなければ、治りも早いだろうし、どんなに楽だっただろうと実感していたから、聞き流すわけにはいかなかったのだ。

でも、竹のガーゼって何？　普通ガーゼは綿だろう？

会話に勝手に乱入して聞き出したところ…どうやら竹には抗菌性があるらしい。傷口に繁殖する菌を抑え、優れた吸水性、吸湿性で浸出液を包み込んでくれる結果、皮膚と癒着することもないのだという。本当ならこんなありがたいことはない。竹には消臭性があることは、竹炭がトイレなどに置かれていることから知っていた。抗菌作用についても、昔、握り飯をタケノコの皮に包んで持ち運んだのも、腐敗を防ぐためと聞いたことがある。

でも、竹から生まれた布が存在するということは知らなかった。もっと詳しく話を聞きたいという思いが募り相田さんが代表を務めるナファ生活研究所を訪ねてみることにした。

新宿の超高層ビル群が近くに見える一画。密集したコンクリートの建物の隙間の、よほど注意していないと見逃しそうな千両の赤い実や寒椿の花などが咲く極細の小道を進んだ先にある一軒家。都内でよくぞ生き延びたものだと驚くような民家で、相田さんはフワフワした真っ白いものを見せてくれた。

「これが竹から抽出した繊維です。竹で布ができないかと思ってから、繊維が抽出できるまで2年かかりました。いろいろな種類の竹で実験して、さらにブレンドしてみたり。でも、なかなか紡績しまともな糸にすることができない。2年目にやっと慈竹という中国西南地区に自生する竹に絞ることで、糸に紡げる繊維ができたんです。ちょっと掌の上に乗せてしばらくじっとしていて下さい」

一見、綿あめのように見える。光沢もあって、白く輝いている。これが慈竹なるものから生まれた繊維なのか。実に美しい。溶けてしまいそうな繊維を眺めていると、掌がちょっと暖かさを感じているのに気がついた。カイロのように暖かさが皮膚に伝わったのではなく、皮膚の方が内側からポカポカしてきて、その感覚が徐々に広がってくる感じ。はて、これはどういうことなのか。

「僕も最初、同じように何で暖かく感じるのかって思いました。やわらかくて気持ちのいいものに触れると、人は緊張が解けて筋肉が緩むんだそうです。筋肉が緩むと、筋肉の中の毛細血管に血液が流れる。血行がよくなって暖かさを感じるようです。竹で布ができないかと、竹と向かい合ってから、僕自身も一体これはどういうこと？と驚きながら、いろいろなことを発見してきたんです」

どうやら、ある予測を立てて竹を生かそうと計画的に取り組んだということではないようだ。では、そもそも何で竹から繊維を抽出して布を作ろうと思い立ったのか。聞くと、理系出身ではなく文科系だという。

「なぜ？とこれまでも聞かれて、未使用の資源を活用するとか答えてきましたが、それは結果であって、本当は1999年にふと竹から布を作ろうと頭に浮かんだんです」

しかし、頭に浮かぶには何か前段に思いつきに導く流れのようなものはあるだろう。パッと浮かんだものは、根を張る思いが伴わなければ、2年間もの先の見えない試行錯誤に耐えるはずがないのではないか……。

「その頃、中国産の安いタケノコが輸入されて、高価な日本産のタケノコが売れなくなってまして、その結果、竹林が荒れて、竹がはびこって山のみかん畑を侵食したとか竹が悪者扱いされる雰囲気があったんです。竹ってそんな悪いヤツじゃない。竹がなければ、茶道だって成り立たないと憤慨してました」

相田さんの思いは人間の側に立ったというより、竹の側に立っての世の中への反発だったようである。無意識に竹の側に立っていたのは、忘れていた幼い頃の思い出があったから。

長崎の大村生まれの相田さんは、海にも山にも3分という環境で18歳までを過ごしている。曾祖父が築いた資産で、祖父は生涯仕事をしないで、様々な発明をしたり趣味の世界に没頭して生きた人で、相田さんの遊び道具を作ってましたね」

竹は、祖父との思い出、自然豊かな故郷の記憶にまつわる大事なもの。相田さんの思いつきはこんな土壌に根ざしていたのだろう。

竹布を作ろうと思い立って最初にとった行動は、本屋や図書館で竹布の作り方を調べること。しかし、作り方どころか、竹関係の資料が極端に少ないということに気づかされた。竹から布を作った前例がないという厳しい現実にいきなり直面したわけだ。

「ウソだろうって感じでした。でも、じゃ止めようとは思わなかった。それなら木からパルプを作る方法にならってパルプ、そして繊維ができるかどうかやってみようと一歩を踏み出しました」

なぜ竹から布を作ろうと先人たちが考えなかったのか。竹は中が空洞で、物流にコストがかかる割に利用できる部分が少なくて効率が悪い。しかも繊維を抽出するのが難しい。もし相田さんが理系や経済系の玄人だったら、即刻断念していただろう。しかし、文系で直感系で素人だから、作ってみたいという情熱だけで突っ走ることができたのだと思う。

竹の道に入るまでの相田さんは、大学卒業後は美術関係のフリーランスの記者、30歳からはプロダクトデザイナーとして、オリジナルの製品を生み出したり、ガラス職人と二人三脚でガラス製品の製作販売などを展開したが、相棒の職人さんの急死をきっかけに石けんからオモチャまで素材からこだわるモノづくりへとシフト。その中で繊維との縁もできた。多くの人に絹のタオルの心地よさを知ってもらうために、廃棄されていた繭のカスを紡績し直して安価で本物の絹のタオルを作り大ヒットさせている。逆風にさらされた大切な思い出にまつわる竹と繊維は、相田さんの歴史の中では確かに絡み合っている。

そして、2001年春、ついに慈竹から抽出できた繊維で試作品のボディタオルが誕生。絹製、綿製、そして竹製のタオルを風呂場に並べ、肌触りや泡立ちなどを比較する実験を3カ月ほど続けていた時、タグに黒いカビが生じているのに気がついた。匂いを嗅いでみると、綿や絹は使用当初とは違う臭いがしたが、竹製のものはカビも臭いもなかった。なぜなのか知りたくて日本食品分析センターに抗菌テストを依頼してみることにした。

「当時話題になっていた黄色ブドウ球菌の耐性菌MRSA菌で受けました」

一般的な綿と竹の糸に4万個の菌を接種し、37℃に保って18時間後の生菌数を調べるテストの結果、綿は400万個に増加していたのに対して竹布は検出せず。センターでも何かの間違いかと3度同じ実験をしたが結果は同じだったという。これに誰よりもびっくりしたのは相田さん自身だった。

「今までなかったものが生み出されたとしたら、私が作ったのではなく誰かが私を通じて世に送り出したのかもしれないと思いました。それならどういう目的で竹の繊維を活用するべきなのか考え続けました。浮かんだのは、『人が最も痛み苦しむその時に、そっと傷に寄り添い、ただ快癒を祈る一枚のガーゼ』というフレーズでした。あ、この繊維がもっとも生きるのはガーゼなんだ！　そこから、世界中の医療機関のガーゼをいつの日にか竹布に変えたいという夢が生まれました」

院内感染のもとになるMRSA菌が抑えられるなら、ガーゼばかりか病院内のカーテンやシーツ、マスクや白衣などにも利用できたら感染リスクを減らせるのではないか。

芽生えた次の夢のために何をしたらいいのか。竹を植えなければ！という答えが出た。医療現場の消費に耐え、世界中に供給できるための竹林を育てる。竹は、成長が早く、農薬も肥料も必要なく、驚異的な繁殖力を持ち、寿命も長い。中国でしか育たない慈竹のために、中国で広大な竹林を相田さんは育てている。3年後に竹林は大量の竹布を生み出すことができるようになる。

夢のためにクリアしなければならないハードルは次々に現われる。日本の大学病院での臨床には膨大な費用がかかるため、供給体制が整う1年前にヨーロッパでの臨床を実施することになっているという。衛生材料として登録するには、これまた費用のかかる規制を突破しなければならない。破竹の勢いという言葉に、早さだけでなく、どんな状況でも突き進んでいく強さも含まれるなら、医療現場で相田さんの夢が叶う日はいつかやってくるのだろう。

それまでは、竹布の心地よさや感触を少しでも伝えるために、生活の現場で人と共存できるタオル類、マフラー、肌着、ソックス、ハンカチなどの製品で暮らしに寄り添っている。

竹で布ができないかと思ってから、2年。ようやく、糸に紡げる繊維を開発

竹布は現在、下着やインナー、シーツなどさまざまなアイテムに製品化されている。相田さんの首元のショールも、竹布で織り上げたもの。優しい肌触りだ。

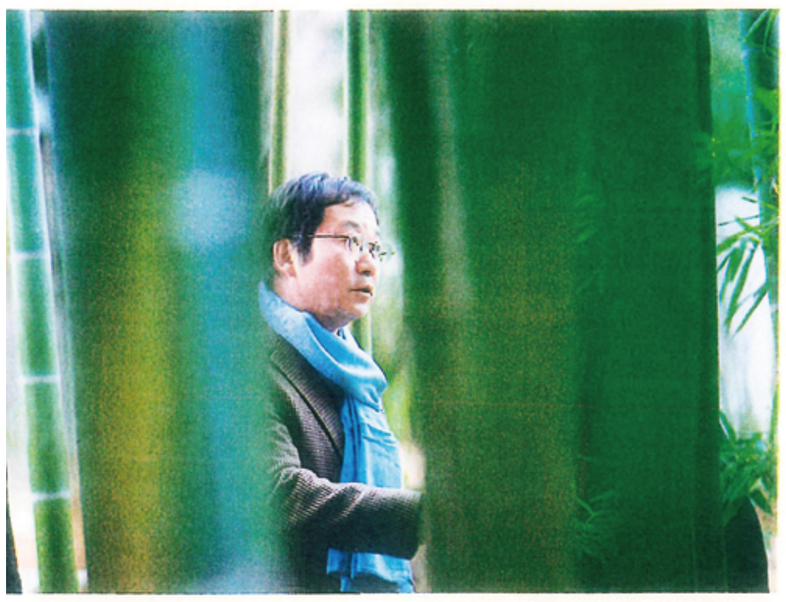
Profile
そうだ・まさひこ●1956年生まれ。大学卒業後、フリーの美術記者に。その後、モノづくりの世界に入り、ガラス製品のデザインや絹を原料としたボディタオルなどを手掛ける。97年にナファ生活研究所を設立。99年から竹布の開発に着手。
http://www.nafa-take.com

2年間の試行錯誤の後、ようやく取り出すことに成功した竹の繊維。

竹繊維は、中国西南地区を中心に自生する"慈竹（じちく）"が原料。

竹の繊維を掌に乗せると、やがて掌の内側からじんわり暖かくなってくる。

光沢があり、白く輝く竹の繊維。実に美しい



「夢は、世界中の医療機関のガーゼを竹布に変えること」

芽生えた夢のために何をしたらいいのか？「竹を植えなければ！」

Profile
よしなが・みちこ●1950年埼玉県生まれ。東京外国語大学卒業。競馬専門紙などの記者を経て作家に。85年『気がつけば騎手の女房』で大宅壮一ノンフィクション賞受賞。執筆の他、テレビのコメンテーターなどでも活躍中。

撮影／橋本 哲

※主婦の友社『ゆうゆう』に掲載された「竹布」相田社長の記事です。

展示即売会 ●日　時：10月3（金）～5（日）
●場　所：まほろば本店 2Fにて
癒しの繊維 竹布 -TAKEFU-
※期間中、相田社長も会場にいらっしゃいます。
ぜひお声掛け下さい。（不在の場合もございます）